# TOEIC Bridge と TOEIC の関係について

上垣宗明*

# Relationship between TOEIC Bridge and TOEIC Scores

Muneaki UEGAKI*

ABSTRACT

This paper focuses on relationship between TOEIC scores and TOEIC Bridge scores. In January 2013, every 3rd grader at Kobe City College of Technology was given TOEIC Bridge test. The following academic year, they had the TOEIC Test in November. A questioannaire was administered to every student in February, 2013. With statistical analysis, we analyzed the relationship among their TOEIC scores, TOEIC Bridge scores, and their motivations for English and English learning. Based on their TOEIC Bridge scores, we divided them into three groups. Their TOEIC Bridge scores and their TOEIC scores had slight correlation, especially concerning the lower and the higher scoring students of TOEIC Bridge, these scores scarecely had correlation. The results of the analyzed questioannaire showed that the higher motivated students got the higher scores on TOEIC Bridge and on TOEIC. That tendency appeared in the Reading Section of TOEIC more clearly than the Listening Section of TOEIC.

*Keywords* : TOEIC Bridge Score, TOEIC Score, Motivation

## 1. はじめに

神戸市立工業高等専門学校（以下，本高専）は，2012 年 11 月に国際コミュニケーション英語能力テスト(Test of English for International Communication：以降 TOEIC)を初めて 4 年全学生に受験させた．TOEIC は，英語能力を測定するテストとして社会でも広く受け入れられ，多くの企業で採用や昇格の際に用いられている．本高専でも 2011 年度より専攻科入試では，当日の英語試験に代わり，TOEIC スコアを英語の試験点数に換算し合否判定の資料として用いている(1)．大学入試，大学への編入試験や大学院入試でも多くの教育機関で用いられている．

TOEIC のホームページ(2)に，TOEIC に関する様々な公式データが掲載されている．受験者数は，2011 年以降 200 万人以上で，最近は，公開テストに比べ IP テストでの受験者が増えている．また，全受験者数や大学各学年，高専各学年の受験者数，平均点なども公開されており，研究者だけではなく，受験者にとっても，非常に貴重なデータを得ることができる．

## 2. 調査対象について

本稿では，本高専の 2012 年度 3 年の全 6 クラスの学生を対象に，2013 年 1 月に実施した TOEIC Bridge のスコア，翌月 2 月の英語演習の授業中に実施した英語や英語学習に対する動機づけに関する質問紙，そして，4 年時の 2013 年 12 月に実施した TOEIC スコアを分析対象とする．TOEIC Bridge は 224 名が受験，質問紙には 232 名が回答，TOEIC は 229 名が受験したが，全てを受けた学生は 207 名だったので，この 207 名を分析対象とする．本調査の統計処理は，「エクセル統計 2008（SSRI：社会情報サービス株式会社）」を使用した．

## 3. TOEIC Bridge と TOEIC について

### 3.1 TOEIC Bridge の結果

TOEIC Bridge は，Listening と Reading の 2 つのセクションからなり，それぞれ 50 問，計 100 問出題される．各セクションは 2 点刻みの 10～90 点で評価され，トータルスコアも 2 点刻みの 20～180 点で評価される．分析対象とした 207 名の TOEIC Bridge の結果を表 1 に示す．

* 一般科　教授

表１　TOEIC Bridge の結果

| n = 207 | Avg. | Max | Min | S.D. |
|---|---|---|---|---|
| Total | 125.1 | 172 | 88 | 15.1 |
| Listening | 62.2 | 86 | 30 | 7.8 |
| Reading | 62.9 | 88 | 40 | 9.1 |

（n＝人数　Avg.=平均点　　Max = 最高点
Min＝最低点　S.D.=標準偏差 ）

表１より，Listening と Reading の平均点はほとんど同じだが，Reading の標準偏差の値が高く，スコアにバラつきがあることが分かる．つまり，Reading に関しては，Listening よりも学生の力の差が大きいといえる．2013 年度の TOEIC の公式データ(3)では，IP テストでの TOEIC Bridge の全国高専３年生(3,256 名受験)の平均は，Listening が 59.5，Reading が 59.1，トータル 118.6 であった．全国の平均と本高専の平均を比較すると，Listening でも Reading でも全国平均よりも３点近く高い．また，全国では Listening の方が僅かだが平均点が高いが，本高専では，Reading の方が平均点は高かった．標準偏差を考慮すると，全体的に英語力は全国平均よりも高いといえるが，Reading に関しては，Listening に比べて，学生間での差が大きいことが分かる．

### 3.2 TOEIC の結果

TOEIC も TOEIC Bridge と同様に，Listening と Reading の 2 つのセクションからなり，TOEIC Bridge よりも問題数が多く，それぞれ 100 問，合計 200 問出題される．各セクションは５点刻みの 5～495 点で評価され，トータルスコアも５点刻みの 10～990 点で評価される．分析対象とした 207 名の TOEIC の結果を表２に示す．

表２　TOEIC の結果

| n = 207 | Avg. | Max | Min | S.D. |
|---|---|---|---|---|
| Total | 342.5 | 700 | 130 | 94.5 |
| Listening | 198.9 | 390 | 80 | 51.9 |
| Reading | 143.6 | 35 | 40 | 52.0 |

（n＝人数　Avg.=平均点　　Max = 最高点
Min＝最低点　S.D.=標準偏差 ）

表２より，Listening の平均点が Reading よりも 55 点近く高く，標準偏差にはほとんど差がみられない．Listening の方が良いスコアを取っていることが分かる．2013 年の TOEIC の公式データ(4) では，IP テストでの TOEIC の全国高専 4 年生(8,273 名受験)の平均点は，Listening が 205，Reading が 136，トータル 341 であった．TOEIC Bridge と同様に，調査対象の学生は，全国の同年代の学生と比較すると Reading の方が良いことが分かる．TOEIC Bridge では，標準偏差にバラつきがあり，本高専内の学生間での力の差があることが分かったが，TOEIC では，Reading の標準偏差が Listening とほぼ同じ値を示しているので，Reading に関する学生間の力の差は縮まっている．また，Reading の全国の平均点との比較では，TOEIC Bridge で 100 点中約４点の差があったが，TOEIC では，500 点中約６点の差となっており，全国平均に近づいている．

### 3.3 TOEIC Bridge と TOEIC の分析

TOEIC Bridge のスコアを基準に TOEIC Bridge, TOEIC のスコアを上位，中位，下位の３群に分けた．それぞれの群の TOEIC Bridge, TOEIC のスコアを表３に示す．

表３　各群の TOEIC Bridge と TOEIC の結果

| | | Avg. | Max | Min | S.D. |
|---|---|---|---|---|---|
| 上位群 n=65 | Bridge | 142 | 172 | 134 | 8.2 |
| | TOEIC | 420.6 | 700 | 275 | 95.3 |
| 中位群 n=70 | Bridge | 126 | 132 | 120 | 4.1 |
| | TOEIC | 327.9 | 515 | 130 | 71.0 |
| 下位群 n=72 | Bridge | 109 | 118 | 88 | 7.6 |
| | TOEIC | 286.3 | 400 | 140 | 61.9 |

（Avg.=平均点　　Max = 最高点
Min＝最低点　S.D.=標準偏差 ）

表３より，上位群の TOEIC Bridge と TOEIC のスコアは他群と比較してバラつきがあり，スコアの開きが一番大きい．つまり，上位群は，学生間での英語力の差が大きいことを示している．中位群では，TOEIC Bridge のバラつきは小さく，ほぼ同じような実力の学生が多いことが分かる．しかし，TOEIC の結果は，標準偏差において上位群よりも低い値だが，下位群よりも高く，少しだが両テストにおいて英語力に違いがみられる．下位群では，TOEIC の標準偏差の値が一番低く，同じような実力の学生が集まっている．つまり，TOEIC Bridge と TOEIC で下位群の学生は英語力にあまり変化が生じず，TOEIC Bridge で良くないスコアの学生は TOEIC でも同じようにスコアが良くなかった学生が多いことが分かる．

それぞれのテストで各群に統計的に有意差が認められるかをクラスカル・ウォリス検定で分析した．その結果を表４に示す．

表４　各群の比較

| TOEIC Bridge | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | $\chi^2$値 | P 値 | 判定 |
| 上位群 | 中位群 | 42.90 | .000 | ** |
| 上位群 | 下位群 | 183.06 | .000 | ** |
| 中位群 | 下位群 | 49.98 | .000 | ** |
| TOEIC | | | | |
| | | $\chi^2$値 | P 値 | 判定 |
| 上位群 | 中位群 | 29.89 | .000 | ** |
| 上位群 | 下位群 | 73.30 | .000 | ** |
| 中位群 | 下位群 | 9.71 | .008 | ** |

** ＝1%有意　＊＝5%有意

表４より，両テストにおいて各群で，1%水準の有意差を確認できた．両テストにおいては，各群では英語力にはっきりとした差があることが分かった．

次に，TOEIC Bridge と TOEIC での全体と各群において，差があるのかを詳細に検討する．TOEIC Bridge と TOEIC では，評価が 190 点満点と 990 点満点と異なっているために，通常の有意差を求める t 検定などは利用できず，順位の相関を求めるスピアマンの順位相関係数を用いて検定した．その結果を表５に示す．

表５　全体，各群での両テストの差

| | n | P値 | 判　定 |
|---|---|---|---|
| 全体 | 207 | .0000 | ** |
| 上位群 | 65 | .0001 | ** |
| 中位群 | 70 | .06 | |
| 下位群 | 72 | .005 | ** |

** ＝1%有意　＊＝5%有意

全体，上位群，下位群では，1%水準で有意差が認められた．TOEIC Bridge と TOEIC の平均点と標準偏差から分析した通りである．しかし，中位群に関して，TOEIC Bridge と TOEIC の平均点と標準偏差から僅かに英語力の違いが見られたが，スピアマンの順位相関係数では 5%水準でも有意差は認められなかった．

Listening と Reading の各セクションに分けて，更に詳しい検討を加える．表６に，各群の TOEIC Bridge と TOEIC における両セクションの結果を示す．

表６より，上位群の TOEIC の Reading において，標準偏差が，TOEIC の Listening や他群の両セクションよりも大きく，学生の力に差があることが見て取れる．中位群は TOEIC Bridge の標準偏差が低く，全学生が同じようなスコアを取得していることが分かる．下位群では TOEIC Bridge の Listening と Reading の標準偏差が高く，スコアにバラつきがある．一方，TOEIC では，下位群の Reading は他群に比べ標準偏差が低く，スコアがまとまっている．下位群の Reading は，下位群の他の標準偏差とは反対の傾向を示し，その値が低かった．平均点と標準偏差からではなく，統計的に両テストに差があるのかをスピアマンの係数を用いて検定した．その結果を表７に示す．

表６　各セクションの結果

| | | Listening | | Reading | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | Avg. | S.D. | Avg. | S.D. |
| 上位 | Bridge | 69.72 | 5.1 | 72.25 | 5.37 |
| | TOEIC | 237.92 | 50.05 | 182.69 | 57.32 |
| 中位 | Bridge | 62.83 | 3.74 | 63.14 | 3.79 |
| | TOEIC | 195 | 51.5 | 122 | 39.89 |
| 下位 | Bridge | 54.92 | 5.87 | 54.08 | 6.35 |
| | TOEIC | 167.64 | 38.53 | 118.68 | 34.69 |

表７　両セクションの各群の差

| | | N | P値 | 判定 |
|---|---|---|---|---|
| Listening | 全体 | 207 | .00 | ** |
| | 上位 | 65 | .013 | * |
| | 中位 | 70 | .088 | |
| | 下位 | 72 | .092 | |
| Reading | 全体 | 207 | .00 | ** |
| | 上位 | 65 | .00 | ** |
| | 中位 | 70 | .052 | |
| | 下位 | 72 | .00 | ** |

** ＝1%有意　＊＝5%有意

表７より，両セクションとも全学生を対象とした比較では，1%水準で有意差が確認できた．しかし，Listening では，上位群は 5%水準で有意差は認められたが，他群では有意差は認められなかった．また，Reading セクションでは，中位群以外は 1%水準で有意差が認められた．Listening よりも Reading の方がはっきりと差が表れていることが分かる．

## 4. 質問紙について

英語や英語学習に関する動機づけを調査するための質問紙を，『外国語教育リサーチマニュアル』(5) を参考にして著者が作成した．16 の設問（Appendix 1 ）

からなり，４段階のリッカートスケール（1. 全然そう思わない，2. あまりそう思わない，3. だいたいそう思う，4. まったくそう思う）で回答を求めた．回答する前に「このアンケートは成績と全く関係がありません．自分の気持ちにあてはまるところを○で囲んでください．」と教示した．

質問紙が同じような概念を測定しているのかを示す指標である内的一貫性について注意を払った．内的一貫性を測定するためのクロンバックα係数を用いた．ゾルタイは，「うまく作られた質問紙であれば，たとえ10項目程度しかない場合でも，内的一貫性による信頼度係数は0.8程度あります」(6) と述べている．この指摘に沿うように，クロンバックα係数が0.8に近づくように調整した．

質問紙のクロンバックα係数を求めると，前回の調査(7) と同様に設問６“英語を勉強するのは嫌だ”，設問８“高専では英語の勉強は必要ないと思う”，設問９“今後，英語よりも数学のほうが大切だと思う”の相関係数がマイナスの値を示した．設問６は-0.38，設問８は-0.29，設問９は-0.14 を示していた．そのために，この３つの設問を“5－X（X は素点）” の逆数にし，再度，クロンバックα係数を求めた．全ての値でプラスを示し，α係数は0.79となった．ゾルタイが指摘している0.8に非常に近い数値となり，この質問紙の信頼度は確保できているといえる．

次に，質問紙の結果をTOEIC Bridgeの点数に基づき，上位群，中位群，下位群の３群に分けた．その結果を表８に示す．

表８　各群の質問紙の結果

| | n | Avg. | S.D. | Min. | Max |
|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 207 | 45.89 | 6.45 | 60 | 22 |
| 上位 | 65 | 48.2 | 5.64 | 60 | 35 |
| 中位 | 70 | 45.8 | 6.03 | 57 | 32 |
| 下位 | 72 | 44 | 6.9 | 58 | 22 |

（n＝人数　Avg.=平均点　　Max＝ 最高点
Min＝最低点　S.D.=標準偏差 ）

表８より，平均値は，上位群が高く，その次に，中位群，下位群の順番となっている．上位群の方が英語や英語学習に対する動機付けが高いことが平均値から推測できる．また，標準偏差では，上位群は一番バラつきが少なく，値にまとまりがある．下位群では標準偏差の値が高く，値にバラつきがあり個人によって違いが大きい．

各群に有意差があるのかをクラスカル･ウォリス検定で分析した．その結果を表９に示す．

表９　３群の比較

| | | 差 | $\chi^2$値 | P値 | 判定 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上位群 | 中位群 | 2.4 | 4.7973 | .0908 | |
| 上位群 | 下位群 | 4.2 | 13.5131 | .0012 | ** |
| 中位群 | 下位群 | 1.6 | 2.2481 | .3250 | |

** ＝1%有意　＊＝5%有意

表９より，上位群と下位群においては1%水準で有意差があり，上位群の学生の方が英語や英語学習に対する動機づけが高いことが分かる．反対に，下位群は上位群に対しては，有意に動機づけが低いといえる．中位群については，上位群と下位群ともに有意差は認められなかった．

次に，16の設問で，各群によって違いがみられるのかを明確にするために，全体と各群の各設問の平均値，標準偏差を表１０に示す．

表１０　全体と３群の各設問の数値

| 設問 | 全体 | | 上位群 | | 中位群 | | 下位群 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Avg. | S.D. | Avg. | S.D. | Avg. | S.D. | Avg. | S.D. |
| 1 | 3.55 | 0.65 | 3.74 | 0.44 | 3.49 | 0.76 | 3.44 | 0.67 |
| 2 | 2.94 | 0.87 | 3.15 | 0.78 | 2.9 | 0.85 | 2.79 | 0.95 |
| 3 | 3.55 | 0.65 | 3.66 | 0.54 | 3.57 | 0.58 | 3.43 | 0.78 |
| 4 | 1.72 | 0.77 | 1.92 | 0.76 | 1.84 | 0.79 | 1.43 | 0.67 |
| 5 | 3.71 | 0.55 | 3.85 | 0.4 | 3.63 | 0.68 | 3.65 | 0.51 |
| 6 | 2.55 | 0.91 | 2.91 | 0.84 | 2.59 | 0.86 | 2.18 | 0.88 |
| 7 | 2.86 | 0.76 | 2.89 | 0.81 | 2.79 | 0.76 | 2.9 | 0.72 |
| 8 | 3.44 | 0.7 | 3.66 | 0.57 | 3.36 | 0.76 | 3.33 | 0.71 |
| 9 | 2.86 | 0.78 | 3.02 | 0.62 | 2.76 | 0.84 | 2.82 | 0.83 |
| 10 | 2.5 | 0.95 | 2.55 | 0.97 | 2.66 | 0.92 | 2.29 | 0.96 |
| 11 | 2.7 | 0.81 | 2.8 | 0.77 | 2.64 | 0.8 | 2.67 | 0.86 |
| 12 | 2.62 | 0.93 | 2.77 | 0.98 | 2.6 | 0.89 | 2.5 | 0.9 |
| 13 | 2.56 | 1.1 | 2.51 | 1.13 | 2.54 | 1.14 | 2.61 | 1.03 |
| 14 | 2.9 | 0.9 | 2.98 | 0.93 | 2.94 | 0.93 | 2.79 | 0.85 |
| 15 | 3.4 | 0.77 | 3.55 | 0.66 | 3.4 | 0.75 | 3.26 | 0.86 |
| 16 | 2.03 | 0.76 | 2.26 | 0.8 | 2.07 | 0.75 | 1.79 | 0.67 |

（設問６，８，９は逆数）

表１０において，特徴的な設問について検討する．多くの設問で，上位群，中位群，下位群と徐々に平均値が下がっている．特に設問１は，上位群と下位群では，0.3 異なっており，標準偏差は上位群の数値が低く，

バラつきが少ない．上位群の学生は，全体として，他群より英語が通じたときに強く喜びを感じていることが分かる．同様な結果が設問２，３でも表れている．

設問４に関しても，平均値は１点台と低いにも関わらず，値の開きが 0.49 と２番目に大きく，下位群の方が英語を難しいと強く感じていることが分かる．

設問５は，他の設問とは異なり，上位群だけが 3.85 と高い値を示しているが，中位群と下位群はそれぞれ 3.63，3.65 であり，上位群とは約 0.2 の差がある．この設問から上位群だけが英語の必要性を強く感じていることが分かる．上位群の標準偏差も 0.4 と低い値であり，上位群全体の特徴である．

設問６は，上位群と下位群で平均値の開きが 0.73 と一番大きかった. この設問は逆数となっているので，上位群よりも下位群の方が英語の勉強を嫌いだと強く感じていた．

設問７については，上位群と下位群では，平均値で 0.1 と最も差が少なく，両群で単語や熟語が文法よりも大切だと感じていることが分かった．

多くの設問とは異なり，下位群，中位群，上位群の順で平均値が高くなっていたのは設問１３だけであった．上位群と比較し下位群の方が平均値で 0.1 高かったが，全ての群で標準偏差が 1.1 点台と他の設問よりも高かった．外国で暮らしてみたいという設問については，各群の中でも学生個人によって感じ方が異なっているが，下位群の方が海外で暮らしてみたいと思う気持ちが強い傾向にあるといえる．

## 5. まとめ

TOEIC Bridge，TOEIC，質問紙を TOEIC Bridge のスコアを基準に，上位群，中位群，下位群の３群に分け，詳細に分析した．

TOEIC Bridge と TOEIC のスコアに関して，全学生対象では有意差があることが分かった．TOEIC Bridge の 10 カ月後に TOEIC を受験しているので，その間に，学生の英語力に変化が生じていたことが推測できる．次に３群について検定した結果，上位群と下位群では，1%水準の有意差が認められたが，中位群に関しては，有意差は認められなかった．つまり，中位群に関しては，TOEIC Bridge と TOEIC のスコアはほぼ同じ結果であった．しかし，上位群と下位群では，TOEIC Bridge と TOEIC とでは異なる結果となった．上位群と中位群では，TOEIC Bridge で 16 点，TOEIC で 93 点の差があった．一方，中位群と下位群の TOEIC Bridge の差は 20 点，TOEIC では 41 点の差しかなかった．中位群を基準にすると，上位群は TOEIC のスコアが良く，下位群は TOEIC Bridge のスコアが有意に良いといえる．

質問紙から，上位群に関しては，下位群と比較し，英語や英語学習動機が高いことが分かった．TOEIC Bridge を受験してからほぼ 10 ヵ月後に TOEIC を受験しているので，その間，上位群の学生は TOEIC でより高いスコアを取得するために努力をしたことも考えられ，その結果，TOEIC のスコアが高くなったと推測できる．

TOEIC と TOEIC Bridge の Listening と Reading の各セクションも分析した．Listening に関して，TOEIC Bridge と TOEIC で 1%水準の有意差が見られたのは全体だけで，各群では上位群にのみ 5%水準で意差が見られた．全体は，207 名と多くの学生を対象として差の検定を行っているために差が見られやすい．しかし，対象人数が上位群，中位群，下位群とほぼ同じ人数を対象とした検定にも関わらず，上位群にのみ 5%水準で有差が見られたのは，上位群の学生が TOEIC Bridge に比べて, TOEIC で良いスコアを取った結果である．Reading に関しては，中位群のみ有意差が認められず，全体，上位群，下位群では 1%水準の有意差が見られた．Listening と比べて，Reading の方が英語力の差がスコアにはっきりと出ているために，有意差が認められた．特に注目すべきは，中位群の TOEIC の平均値で，上位群と中位群では 40 点，中位群と下位群では 3.7 点の差しかない. TOEIC Bridge では，上位群と中位群で 7.4 点，中位群と下位群で 7.4 点とほぼ同じスコアの差になっている．中位群の TOEIC の Reading のスコアの悪さが目立っている．

全国の同年代の学生と比較すると，TOEIC Bridge では，上位群で 23.4 点，中位群で 7.4 点良いスコアを取っており，下位群では 9.6 点悪いスコアだった．しかし，TOEIC では，上位群では 81 点とかなり良いスコアだが，中位群で 14 点，下位群で 56 点も悪いスコアであった．先述したとおり，上位群の動機づけが高く，TOEIC Bridge 受験後 10 ヶ月間英語の学習をしてきた結果，英語力を身に付けることができたが，中位群，下位群では英語や英語学習への動機づけが高くなく，この 10 ヶ月間であまり英語力を身につけることができずに，上位群との差や全国平均との差が広がったといえるだろう．

## 5. 今後の課題

TOEIC Bridge の受験後から，10 ヶ月間で上位群の学生はしっかりと英語力を身につけていたことが分かったが，中位群，下位群の学生は，英語学習動機もあまり高くなく，英語力を身に着けていない現状が浮き彫りになった．今後は，中位群と下位群の学生の英語力の向上を目指した英語教育が必要である．

最後に，TOEIC Bridge，TOEIC，動機づけに関する質問紙の３つを対象として調査を行ったが，今回の調査結果がこの学年特有のものか，神戸高専の全学年にいえることなのかを，今後も継続して調査していく必要性を痛感した．

## 参考文献

(1) 神戸市立工業高等専門学校　平成26年度　専攻科学生募集要項
(2) TOEIC ホームページ
http://www.toeic.or.jp/
http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/DAA2012.pdf
(3) (2)と同じ
(4) (2)と同じ
(5) ハーバード・W・セリガー, イラーナ・ショハミー著, 土屋武久他訳:「外国語教育リサーチマニュアル」, 大修館書店, 2001.
(6) ゾルタイ・ドルニェイ著, 八島智子, 竹内理訳:「外国語教育学のための質問紙調査入門」, 関西大学出版部, 2006.
(7) 上垣宗明:TOEIC スコアと中間・定期試験の点数について, 神戸市立工業高等専門学校研究紀要, Vol.52, 2014.3, pp.97-102.

Appendix 1

| | |
|---|---|
| 1 | 自分の英語が通じるとうれしい |
| 2 | 外国人ともっと会話してみたい |
| 3 | 英語を話せるようになりたい |
| 4 | 英語は簡単だと思う |
| 5 | 将来、英語は大切だと思う |
| 6 | 英語を勉強するのは嫌だ |
| 7 | 文法よりも単語や熟語のほうが大切だと思う |
| 8 | 高専では英語の勉強は必要ないと思う |
| 9 | 今後、英語よりも数学のほうが大切だと思う |
| 10 | 英語以外の外国語も勉強したい |
| 11 | 世界の出来事に関心がある |
| 12 | 外国の文化や習慣を勉強したい |
| 13 | 外国で暮らしてみたい |
| 14 | 将来、エンジニアになりたい |
| 15 | TOEIC でよい点数を取りたい |
| 16 | 英語を使う仕事に就きたい |